



東北 復興日記

まだまだ

▶▶ 235



仙台市若林区長

白川由利枝さん

仙台市若林区は人口約十三万六千人、面積約五十平方キロと、市内で一番小さい区です。二〇一一年三月の東日本大震災では区域の半分以上が浸水し、三百人を超える尊い命が失われるなど甚大な被害を受けました。

今年、生誕四百五十年を迎えた藩祖・伊達政宗公が晩年の居城を設けたのは若林区。杜の都の中でも、とりわけ豊かな自然に恵ま

文化や伝統がつくる「絆」

れ、歴史と伝統に育まれた地域でした。沿岸部を見渡せば、かつて仙台唯一の海水浴場としてにぎわった深沼海岸に人影はなく、美しい松林も跡が残るだけです。

市内に約千五百戸あった避難者用のプレハブ仮設住宅は昨年度末で撤去が完了。区内十三カ所の復興公営住宅と六カ所の防災集団移転地で、新たな暮らしとコミュニティが生まれています。



六郷東部ふるさと交

ただ、順調なことばかりではなく、県内の他市町や福島県から避難し、みなし仮設に住まい続けている方も少なくありません。震災は広大な地域を一度に襲いましたが、復旧や復興はまだらに進み、そのことが多くの人の心に重くのしかかります。住まいやなりわいが再建できても、心の傷が癒やされるのはこれから。復興とは、被災者一人ひとりにとって異なり、恐ろしく息の長い事業であること改めて実感します。

被災した場所で再建に取り組む六郷東部地区で先日、震災後初の「ふるさと交流祭」が開かれました。写真。閉校した東六郷小学校に残る「黒潮太鼓」の伝統は、お隣の六郷小学校に引き継がれ、児童たちの力強い演奏が、涙と笑顔を誘いました。

震災後、「絆」という言葉が注目されましたが、確かな絆は住民自身がつくり出すものであり、そこには祭りや神楽・太鼓など、古くから受け継がれてきた文化や伝統が大きな力を果たすことを、もっと見直すべきではないでしょうか。そんな大切なものの価値を発信していくのも、私たちの重要な役割だと思っています。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。